

---

# 彗星の墮子

Omixi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彗星の墮子

### 【Nコード】

N0378Y

### 【作者名】

O m i x i

### 【あらすじ】

25年前、彗星による地球規模の災害。日本も尋常ではない損害を被った。

その復興のため、第25土地開発公社で、ベテランチームに配属された男のお話。

開発用小型パワースーツを駆りながら開発を進める先輩達と、技術職としてサポートを進める男。

激化する開発競争の中、男は求める地へと確実に歩いてゆく。

そこに立ちふさがる、影。海の底に沈んでいた、とんでもない「  
彗星の墮子」。

男は無事に、海の方こうへとたどり着けるのか。

## プロローグ

25年前。

ヘイロー彗星は地球に急接近し、その起動直下にあつた日本以下アジア各国のみならず、世界中に壊滅的な被害をもたらした。

具体的には、月の1.5倍の大きさのヘイロー彗星の超接近による地軸の移動を発端とし、震源を地球外核の深部とした超深発地震が国という国を揺らした。

その後、数分もせず未だかつて無い規模の大津波が環太平洋地域を中心に世界中を襲い、各大陸は沿岸部を海に削り取られる結果となる。

そんな、全てを洗い流すような地球的大災害が終わりを告げた頃。「西洋」「南半球」という二つの名を同時に冠する地域は、いつのまにか一年の大部分を夏が独り占めし、溶けた南極の氷で海の面積は地球の7割5分を我物にする。人類はその人口の3/1を奪われ、甲いの火は数年間止むことはなかった。

英語圏の方では、この記録的大事件に「HALO's Choi ce」という名前があてがわれ、瞬く間にその呼称は世界に広がった。日本では、洒落のつもりか「ヘイローの洗濯」と煽り文をつけた全国新聞の見出しのせいで、なぜかその名前が邦訳として全国的に受け入れられてしまっている。

そういう風は大災害に遭つた25年前ですらボケがいまいち抜け切れていなかった日本。

25年後、つまり今の実情は国民のその能天気っぷり、振り回され体質が逆に功を奏した結果と言わざるを得ない。

「洗濯」のわずか半年後、政府が啖呵を切る。

凄惨たる被害を過去のものと割り切り、一旦首都機能を北海道に移して日本の新生を謳ったのだ。もちろんそのような、他の地方をおざなりにする政策に対する国民の反応はと言えば、四面楚歌という四字熟語がこれほど相応しい状況もなかった。しかし、結局政府が押し切る形で首都北海道を宣言し、どこが出所かも知れぬ莫大な金とかつての東京の数倍の土地をふんだんに利用して首都化を進めた。結果首相が4年の任期を満了する頃、「中央北海道」と名付けられた地域では、かつての東京の半分程度の人口とは言え、活気に満ちあふれることとなる。結局、国民は政府の主張するがままに振る舞うこととなったのだ。

かと思えば、首相の名前が代わった1年後、「浄化政策」と銘打ち国家プロジェクトとして沈んだ過去の遺産を文字通りサルベージする作業に極端に人員と税金を割き、前政権とま逆の対応に再び政府は非難を浴びた。

しかし、もともと7000万人にまで減った国民の更に百分の一の規模が関わったこの事業により、結果的に内需はどん底から70%後半台にまで回復し、日本は奇跡的に、わずか10年で災害前比90%にまで国政を回復させた。最終的には国民はこの政策を振り返り、大いに評価した。

僕はこの一連の出来事を体験してはいない。生まれていなかったからだ。

ただ写真と映像、それと文章で知っているのみである。

それから15年が経ち、今。

日本では今、東京に再び息を吹き込もうと、計画自体は20年前に既に持ちあがっていた「海京」建設計画」が、14年前より現在まで進行中だ。

既に現在の関東湾岸（かつての練馬〜八王子中部付近にかけてのライン）より、過去の関東湾岸までの延長工事は進んでおり、今後、

更に半世紀をかけて完成の予定だ。

僕は5歳のころから、海京のわずかな開発完了地区を使った試験居住区に住んでいる。

僕の踏む土の下にはかつてこれほどかというほどに賑わった『都会』があつたと思うと、この総人口1万人とちよつとの、いかにも発展途上と言える街の実情を見てため息が出てくる。

でも、ここは僕の母の生まれた地からそう遠くはない。今も沈んでいるけれど、僕が40を過ぎるころには今の6倍は開発完了地区が大きくなるらしく、その範疇にそこはおさまっている。

僕のルーツのルーツがすぐ近くにあると思えば、この街はグンと魅力的に思えてしまう。顔も覚えていない母の、ぬくもりだけをかすかに記憶している僕にとっては、母の跡をなぞる行為で何よりも幸せを感じ取ってしまうらしい。

海京の開発ペースは年々速くなっている。政府より計画を委託された数十の大きな団体が開発競争を繰り返しているらしく、それによつた開発技術の進歩の伸びは飛躍的だ。かくいう僕も、母の居る土地に一步でも近づくためにその開発競争の渦中に巻き込まれている。

本来なら大学に行くべき年なのだが、僕は自らその道を蹴った。僕の父親も、指揮側の人間として懸命に開発に携わっている。それならば僕も、と思つたからだ。

しかし、父はこの僕の考えに猛反対し、実は今も反対し続けている。区外へ出て、大学に行き、学んでから自分の成したいことに取り組めと言う。高校生だつた僕は、成したいことを成すまでの時間が長すぎる、我慢できない、と言い放ち、夏休みに一人、なけなしの貯金で家を出た。最初の10日で貯金が尽きた。自分の口座を見れば、残り1万円しか残っておらず、仕方なくその1万を帰りの費用に充て、負け犬のように家へ戻つた。

あまり広くないリビングの中央のテーブルに、書きおきがあった。平日の昼間だったので、当たり前のように父はいなかった。そのまゝ一週間、帰ってこなかった。

「仕事が急に忙しくなった。一か月に一度戻ってこれるかこれないかだ。俺には手が余るので、給料の六分の一をお前の口座に振り込む。生活費は毎月俺が払うから、その金は好きに使え。」

こんな放任主義で、半年後お前がどういう風になっているのかだいたい見当はついている。俺はお前が板に付くまで、そんな馬鹿なことはやめると言い続けるだろう。顔を合わせる度に言っただろう」

文面の通り、それから父はまともに帰ってこなかった。深夜、急に戸が開く音がしたと思えば、ぐったりとした父が玄関先に座っていて、僕を見るや開口一番、受験勉強の調子はどうだ、と言う。やっではない、と言えば、胸倉をつかまれる。問いただされた僕は、親父の手伝いがしたい、邪魔だと言うなら別の場所で雇ってもらおうと父をにらみつけて意思を伝えて、殴られる。これが翌年の2月まで続いて、3月からはパターンが変わった。

僕が就職したからだ。

父は顔ではなく腹を狙うようになった。その分、きっちり二倍殴られるようになった。

でも、僕は父に手を出すことはなかったし、父に対して折れることもしなかった。それが父への義であり、父との約束であったからだ。

書きおきはこう続いている。

「お前はそれから、決して逃げるな。いつまでも俺に反抗し続ける。唇をかみしめ、涙を溜めても良いから、家を飛び出すようなマネはするな。」

それがお前の決めたことなら、俺如きの言うことに耳を貸すんじゃない。

俺が認めるまで、抗い続ける』

あの時の父からのメッセージは今でも、大切な場所に閉まってある。父に殴られる度、一字一句記憶したそれを声に出して叫ぶ。

父が認めるまで、僕は抗い続けるだろう。

## プロローグ（後書き）

これはロボットモノです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0378y/>

---

彗星の墮子

2011年10月30日00時09分発行